

少子化社会を考える懇談会「中間とりまとめ」

『子どもを育てたい、育てて良かったと思える社会をつくる～いのちを愛おしむ社会へ』のポイント

なぜいま「少子化社会を考える」のか

いのちあるものと共に生きる喜び

- 先行き不透明な時代にあっては、「いのち」とともに生きることが喜びであり、子どもを通して得られる励ましや元気が大きな心の支え

夫婦出生力の低下という新たな現象

- 「夫婦の出生力の低下」という新しい社会現象により、新人口推計（平成14年1月）では将来の少子化が一層進むとの予測

これまでの少子化対策の評価

- これまでの少子化対策は、子育て負担の軽減により産みたい人が産めるよう環境整備を進めること（特に子育てと仕事の両立支援）に力点

今回のアプローチ

- 少子化への対応を一層進めていくためには、
 - ① 男性を含めた働き方の見直し
 - ② 地域における子育て支援
 - ③ 社会保障における次世代支援
 - ④ 若い世代の自立支援といった分野にも重点を置き、その充実強化が必要

どのような社会を目指すのか

多様な生き方が可能になる社会

- 「仕事も家庭も」、「自己啓発や地域社会での役割を大切にしたい」という多様な考え。
- 多様な価値の選択に基づき、新たな挑戦ができることは、個性や能力を発揮させ経済や企業の活力にもつながる。

子どもを育てたい、育てて良かったと思える社会

- 子育ての努力が報われると感じられれば、子育てをしようとする気となり、希望の持てる社会といえる。

子育てという選択をする生き方が不利にならない社会

- 子育ての負担を自分だけで背負い込むようなことのない社会でなければ、子育てという生き方を無理なく選択できるとはいえない。

子どもや若い世代の成長と自立を支援する社会

- 子育てという前向きな生き方に「挑戦」できるよう、子どもの頃から、「いのち」の大切さにふれ、生きる力を持った自立した人間になれるよう社会が支援することも必要。また、人を育てることで親も成長していくという視点も重要。

子どもも大人も生き生きと暮らせる、活力ある社会

- 「未来からの預かりもの」である子どもは、次の時代に希望と活力を与える。「子どもがいる風景」がふつうである社会では、子どもが親や社会の都合ではなく、自分のリズムで生きられるようになり、大人もお年寄りも無理なくのびのびと暮らせる社会になる。

少子化社会への対応：4つのアピールと10のアクション

(アピール1) 男性を含めた働き方を見直し、「仕事と生活時間のバランス」のとれる働き方を実現する

(アクション1) 多様な働き方が可能な社会の仕組みに変える

- ・パートタイムや派遣、在宅就労など、多様な働き方のメニューが用意され、その間で柔軟に選択や転換ができるようにする。
- ・働き方に見合った均衡処遇を図るための方策を推進するとともに、円滑な職業の選択や移動をやすくするため、職業紹介など労働力需給の調整機能を強化する。

(アクション2) ファミリー・フレンドリー企業に優秀な人材が集まる

- ・男女の固定的な役割分担意識を払拭する。子育てが一段落した後の再就職を進める。
- ・育児に関して一定の条件を満たしている「ファミリー・フレンドリー企業」を支援する制度を一層推進する。

(アピール2) 子育てという選択をする生き方が不利にならないよう、「育児の社会化」を進め、企業・地域・政府と連携して子育て家庭を支援する

(アクション3) 地域において子育て支援のための幅広いネットワークをつくる

- ・子育てサークルなど地域における子育て支援のための資源を有機的に結びつける。
- ・地域ごとの特色を踏まえ、自治体ごとにアクションプランを作成し、地域ごとに主体的に取り組む。

(アクション4) 子育てバリアフリーを推進する

- ・公共施設等に授乳設備や乳幼児コーナー等を整備したり、子育てをしていく際に支障がないようにまちや建物を設計する「子育てバリアフリー」を進める。
- ・公共交通機関等において子ども連れ家族に優先乗車を行うなど、意識面でのバリアフリーを進める。

(アクション5) 子育て支援は妊娠・出産からはじまる

- ・性に関する正しい理解の普及を行うことで、性感染症を予防したり、望まない妊娠や中絶を減らし、これらにより心身のトラブルを予防する。
- ・母子保健、周産期医療を充実するとともに、不妊治療に関する倫理的問題、技術の有効性・安全性、体制整備、経済的負担等の問題について検討する。

(アクション6) 社会保障などにおける次世代を支援する

- ・次の時代の社会保障の支え手を育てる子育てに対し、社会保障の面でも配慮が必要。
- ・社会保険制度を活用し、既存の給付との関係を整理した上で、子育て家庭に配慮を行うことを検討する。

(アピール3) 「家庭を持って子育て」という生き方にも「挑戦」できるよう、若い世代の成長・自立を支援する

(アクション7) 子どもの「生きる力」を育てる

- ・自然体験やボランティア等の機会を提供するとともに、子ども同士が切磋琢磨し、異年齢の集団とふれあう機会を与える。
- ・危機的な子どもの食の状況を改善するとともに、食の場を通じた家族形成や人間性の育成を考える。

(アクション8) 若い世代が子どもや家庭を知り、子どもとともに育つ機会をつくる

- ・地域や学校で、若い世代が子どもと接する機会を設けるとともに、子育ての意義や家庭の重要性についての理解を深める。
- ・子育て家庭の相談に乗り、親になるための情報を学習できるような機会を、地域や学校・行政が提供する。

(アクション9) 若い世代の親離れを進め、自立して家庭を持つための基盤を整備する

- ・奨学金の充実や、若年者の能力開発や適職選択による安定就労の推進など若い世代の経済的基盤を整備する。
- ・市町村を中心に広がりつつある「出会いの場づくり」を支援することを考える。

(アピール4) 少子社会への対応を進め、活力ある「老若男女共同参画社会」を実現する

(アクション10) 少子社会を活力ある社会にする

- ・女性や高齢者が子育てや健康状態など個々人の事情に応じ就業できる環境を整備する。

「企業のトップ」「地域の人たち」「政府関係者」に対する3つのメッセージ

企業のトップの方へ

多様な価値観は経済と企業を伸ばします。家庭と両立できない職場は立ちゆきません。

地域の人たちへ

子育て家庭を地域で支える仕組みをつくろう！子どもにとって育つ場所が「ふるさと」です。

政府関係者へ

国の未来を見据えて、いまずぐ少子化社会への対応を。政府ぐるみで実効ある子育て支援策を。